

[国 語]

クリティカルリーディングの有効性と課題について

ー平和教材のブッククラブを通してー

諏佐ゆかり*

1 研究の目的

「国語」という教科が自己のアイデンティティーの確立に果たす役割は大きい。国語の教科書教材における平和教材の指導について、石原千秋は、次のように述べている。

現在のところ、「平和教育」によって平和に関するイデオロギー教育の一翼を国語教育が担っているわけだが、これら「平和教材」を（いわゆる「学習の手引き」も含めて）読む限り、どうしても情に訴える側面が強くなるだろうと思われる。そういう教え方を否定はしないが、教育する側にははっきりイデオロギーが見えていても、教育を受ける側には見えないイデオロギー教育となってしまう可能性がある。

石原は、戦争の惨禍が物語の主人公一人の悲劇に矮小化される可能性を指摘し、戦争や平和のようなテーマに対し多角的に考え、認識を深める指導の必要性を示唆している。国語科で平和教材を読むことの意義は、教科書教材の読解から過去における戦争が残した傷跡を見つめ直すことだけではない。平和に対し、自分はどうか考えどうするべきかという自己認識を深める読みが必要ではないだろうか。

来年度施行の小学校学習指導要領解説国語編では、その目標解説の中で、「思考力や想像力及び言語感覚」を養うことについて、「思考力や想像力とは、言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力である。思考力や想像力などは認識力や判断力などと密接にかかわりながら、新たな発想や思考を創造する原動力となる。」と書かれている。平和教材として文学作品を教材とする際、感傷的な読みに留まることなく、真に「平和を求めることは何か」といったテーマのもとで思考し、多面的に問い直しながら自己認識を深める学習過程が、新たな発想や思考を創造する原動力につながる学習として求められている。

アメリカで開発されたブッククラブという指導法は、多読とディスカッションを中心に自己の生き方と関連づけ読むことをねらいとする。また、登場人物の気持ちだけではなく、作品構成や登場人物の行動について評価する問いについてディスカッションするクリティカルリーディングを重視している。私は、これまでの実践からクリティカルリーディングの有効性について次の二点を考えている。一つは、学習者が自分自身の生き方や考え方と比べ自己認識を深める点、もう一つは、作品の受容的理解にとどまらず、自己の読み方を再構成する点で、能動的な読みへの転換につながる点である。また、ブッククラブのように同じテーマの本を複数読むことで、テーマへの理解と自己の認識のさらなる深まりへと近づくものと考えた。そこで、本研究では、ブッククラブの指導法を生かした平和教材の学習過程を通し、クリティカルリーディングの有効性について改めて考察したい。

2 研究の方法

一連の学習過程において、授業分析は、ワークシートの記述とビデオカメラにおける発話記録をもとに分析を行った。主に、クリティカルな問いに関わるディスカッションの検討を中心に、学習者の発言やワークシートへの書き込みの分析を中心に考察する。

* 長岡市立中島小学校

3 学習プランの実際（2009年11月～12月実施）

(1) 単元名 平和を求めて

使用教材：「父ちゃんの凧」（学校図書 5 年下）「ヒロシマのうた」（東京書籍 6 年下）「汽笛」（ポプラ社）「一つの花」（光村図書 4 年下）

(2) 単元の目標

- 戦争と平和をテーマにした複数作品について読みながら、ブッククラブ型の読解授業を通して、作品主題とともに単元の大きなテーマとして「平和を求めて生きるとはどのようなことか」について考えることができる。
- 物語を読み、疑問に思ったところやおかしいと思った点から読みの課題を作ることができる。
- 話し合いの中で、読み取ったことを根拠として自分の意見を述べたり、友達の意見に対する自分の意見を根拠と共に発表したりすることができる。

(3) 指導過程について

教材の選択について、教科書教材「父ちゃんの凧」を含め「ヒロシマのうた」「汽笛」「一つの花」の4冊を位置づけた。これらは、共通の作者である長崎源之介と今西佑行の作品で、ともに「戦争と平和」をテーマにしている本である。

【指導過程（全16時間）】

【1次】戦争についてバックグランド・ナリッジをつける。 ①

- ・戦争についての資料を読む。
- ・戦争をテーマにした絵本の読み聞かせを行う。（「おとなになれなかった弟たちに」「戦争で死んだ兵士のこと」「まちゃんと」等）

【2次】父ちゃんの凧でブッククラブを行う。

- ・リードアラウド（質問しながら読み聞かせする）する。 ②
- ・語句調べ ③
- ・キャラクターマップを書き、あらすじを理解する。 ④
- ・疑問に思ったことや話しあってみたいことを書く。 ⑤
- ・話し合い、考えたことをまとめる。 ⑥

【3次】ヒロシマのうたでブッククラブを行う。

- ・原爆についてバックグランド・ナリッジをつける。 ⑦
- ・リードアラウドしながら、語句を確認する。 ⑧
- ・キャラクターマップを書く。 ⑨
- ・出来事や問題場面をシートにまとめる。 ⑩
- ・疑問に思ったことや話しあってみたいことを書く。 ⑪
- ・話し合い、考えたことをまとめる。 ⑫ ⑬

【4次】

- ・戦争をテーマにした他の本を読む ⑭ ⑮
- ・大きなテーマについてまとめる。 ⑯

評価☆

☆戦争について関心を持ったか。

☆教師と共にキャラクターマップや出来事・問題場面についてシートにまとめられたか。

☆問いが作れたか。

☆話し合いで意見を言えたか。
（コミュニケーション力の評価）

☆大きなテーマについて考えが書けたか。

4 授業の分析

(1) 「父ちゃんの凧」の読解を通して

最初に読んだ教科書教材の読みにおいて、学習者は、次のような問いを課題とした。

- a どうして戦争で領土をとろうとしたのか？
- b なぜ、戦場に少年がいたのか？
- c なぜ、少年兵は父ちゃんをねらったのか？
- d なぜ、父は凧作りを始めたのか？
- e なぜ、戦争で凧を作ってもおこられないのか？

戦争の要因である領土争いや少年兵についての知識や平和の象徴としての凧に対する理解の不足が読みの課題として推測できる。授業では、戦争への予備知識（バックグランドナリッジ）として、少年兵に関する資料や領土の意味を考

えさせながら、クリティカルリーディングの問いとして、f 父ちゃんの死に方に納得できるか。g 家族を殺されたらどうなるか。h もし、自分が兵士だったらどうするかについて、教師が問いを提示し話し合いを行った。話し合い後、学習者自身が考えたことをワークシートに記述した。以下は、その抜粋である。

友江はどうして父を殺した中国の少年兵を許したのかが分からない。私だったら、死ぬまでゆるされないと思う。友江は少しおかしいと思う。長崎源之介さんは「きっと世界が戦争が起きずにいたらいいのにな」と言いたかったのだろう。多分、そうしたら、外国のお友だちをいっぱいつくって一生幸せになれると思う。平和は、国と国とがケンカしないで、(戦争をしないで) 国と国とが仲良しになることだと思います。長崎源之介さんも平和が一番だと思ってこのお話を書いたのだと私は思います。私も戦争がどの国にもなくなってほしいと思っています。

この学習者は、父を殺した少年兵を許した友江の心情は理解できないが、平和は大切だと述べている。話し合いでは、「人は、家族が殺される事実を受け入れることは簡単にはできないから、戦争を起こしてはいけないのだ」と述べた。しかし、戦争は、人の命が奪われることが正当化されるものであり、現実問題として戦争がなくなっているわけではないという事実を踏み込んではいない。戦争体験を伝え聞くことさえ身近ではなくなっている学習者にとって、一つの教科書教材の読解だけでは、平和や戦争について自己認識を深めるまでには至らない。一般論として戦争を否定するだけでなく、学習者自身の生き方やものの見方に関連づけ認識を新たにするために、さらに、別の本を平和教材とし読み進めた。

(2) クリティカルリーディングは学習者の読みをどのように深めるか

「ヒロシマのうた」は、原爆で実の母を失ったミ子（ひろ子）が、生命の危機、生活の危機、人間性の危機という3つの困難を人に支えられることで乗り越え、自立していくまでがえがかれている物語である。あらゆる人間性を否定せざるを得ない戦争という状況の中で、人間を救うのは、人間にほかならないことを主題としている。あらすじをおさえた後で、学習者が疑問に思う点や話し合っていた点について問いの形で提示した。それが、以下の問いである。

- a 稲毛さんはなぜ、ヒロ子の実の母が生きていたときに助けなかったのか？
- b もし、自分が水兵だったら、赤ちゃんを見つけたときにどうするか？
- c もし、リヤカーを引いた夫婦に赤ちゃんを引き取ってもらえなかったらどうしたか？
- d 義理の母は、なぜ、ヒロ子を育てる決心をしたのか？
- e 義理の父が生きていたら、どうなっていただろう。
- f 義理の祖母は、ヒロ子のことをなぜきらうのか？
- g 手紙で、家を出て二人ぐらしをすすめることについてどう思うか？
- h 本当のことを知ったヒロ子は、義理の母をどう思うか？
- i ワイシャツにきのこのような原子雲のししゅうをしたのはなぜか？
- j なぜ、ヒロシマのうたという題名なのか？

d, f, h, i の問いは、登場人物の気持ちを考える問いで従来の国語では、丁寧に扱われてきた解釈の問いである。もちろん、これらの問いを通して作品の解釈を深めることは主題をつかむ上で大変重要である。特に、i の問いは、物語全体を捉えなくては答えられるものではなく、主題の読み取りに大きく関わる。

a, b, c, g の問いは、物語の中心人物である稲毛という水兵の行動に対する評価的視点が含まれ、クリティカルリーディングの問いである。学習者にはあまり馴染みのない問いであるが、教師がリードアラウドの過程で発問した問いをもとに、学習者がモデリングし、作成したと考えられる。

授業の初めに学習者があらすじを発表した時、赤ちゃんとその実の母と出会った時に、母を見殺しにしたというつぶやきがあった。そこで、a の問いについてのディスカッションを行った。肯定的な見方をした児童の発言が多かったため、b のパーソナルリーディングの問いに切り替えを図り意見が対立するよう揺さぶりをかけた。それぞれの意見の根拠を次に示す。

(肯定的意見)

- ・戦争中だから
- ・もう、なんか死にそうだったから。助かんないっていうか。確信して助けなかった。
- ・どうせ、運んでも泊らないと思ったのと、最後まで赤ちゃんと一緒にいさせてあげようと思った。

- ・でも、お母さんみたいな人がそこら中でいっぱいいるから。お母さんみたいに大けがしている人が何千人、何万人といるから。一人だけひいきはしてられない。
- ・苦しんで死ぬより、パパッと死ぬ方がいい。ぽっくりいっちゃった方がいい。
- ・夜だし。重いから。
- ・治療っていったって、何もないじゃん。テントにいったん運んだって、何するの？救助っていったって、薬もないのに。助けたって意味がないかもしれないじゃん。

(中立的)

- ・軍医のいるところへ連れて行こうか迷っていたと思う。
- ・自分が、稲毛さんだったら。でも、最初に、「テントは、すぐいっぱいになりました」ってことは、もうテントにははいないくらいになってるってことは、助けても、例えば、飯もない時代だから、助けても結果的には、死んじゃうんだから、とりあえず、赤ちゃんは受け取っていいけど、お母さんは、ほっといちゃダメだけど、とりあえず、死体がある場所くらいまでは、運んでいいと思う。運ぶは運ぶけど、多分、もう助かんないなって、おれだったら思っちゃうと思う。

(否定的)

- ・わたしなら、助ける。お母さんと赤ちゃんだったら助けられるけど、赤ちゃんだけだったら、育てられないから。
- ・助ける。だって、戦争中は、けがをしている人はたくさんいるかもしれないけれど、生きてる人をテントに運ぶんだから、お母さんは、まだ、生きてるんだから、一人でも多く助かる方がいいと思うから、私だったら、一緒に助けます。死んじゃうかもしれないけど、ちょっとは、長生きするかもしれないし。 (下線 諏佐)

意見は、実の母が瀕死の状態であることから合理的判断を下したと受け止める肯定派と少しでも命を延ばすべきとする否定派に分かれた。肯定的な見方がどちらかといえば多数で、特に、男子児童からの否定的な発言はほとんどなかった。一方的な意見の偏りが見られず、3つの立場で意見交換がなされることで、ディスカッションが流動的なものとなり、児童の思考にも影響を及ぼすと考えられる。続くディスカッションの中で、学習者から命の意味を問題提起する場面が見られた。トランスクリプトを示す。

125C 先生、ちょっと違うけど、今だって、裁判で何十人も殺人したらもう死刑なんだから、ちょっと違うけど、そんなに命を粗末にしていいのかな？

126T 命粗末にしてい

127C いくら、何万人も何十万人もいても魚のように見るのはひどいと思います。

128T ジャ、どういう風にしたらいい？薬もなく、助けられないかもしれないけれどもどうすればいいと思う？

129C もうちょっと大切にあつかった方がいいと思う。

130C 大切にするってどうすればいいの？

131T 大切にするって、どういうことですか？

132C 心臓が動いているとか診たり、治療してあげる。

133T 薬はないかもしれないけど、心臓が動いているかなとか、治療してあげることが大切にしている。あなたは？
何にもできないかもしれないけど、あなただったら、どんなことをしてあげたいですか？

134C 生きているかどうか調べる。脈とったり、治療はできるかどうかわかんないけど、できるだけ。

135T もし、自分が死にそうなときにそういうことをしてもらったら、どう思う？

136C 声かけてもらったりする方がうれしいと思う。

137T あなたは？子どもがいるお母さんだったらどうだろう？みんなを残して、早く死にたいっていうかね？

138C 子どもがいるのに、自分だけ死んでしまったら、子どもがかわいそうだなって思うと思う。子どもがかわいそうだし、お母さんとかは、子どもといるのが一番いいと思うだろうから、自分だけ、赤ちゃんを残して死ぬのはいやだと思う。(下線 諏佐)

125Cの発話の下線部「命を粗末にしてい

また、138Cの発話は、これまで、あまり注目されてはいなかった赤ちゃんの母の心情に深く迫っている。瀕死の状態であっても、子どもへの愛情を失わない母親の人間的な姿を理解することは、物語の核心を読み取る上で重要な解釈であり、物語の主題へと迫る契機となった。

従来の国語では、場面ごとに登場人物の気持ちを教師が問いかけ理解を促す指導が多く見られた。学習者は、教師主導の受容的な読み方で教材を理解することとなる。しかし、クリティカルリーディングでは、学習者が自ら多面的に問い直しをはかり相互のディスカッションから理解を深める点で、学習者の能動的姿勢が生かされる。このような主体的学びこそ、学習意欲とともに、読書意欲の向上につながる可能性をもつといえるのである。

(3) テーマをとらえ自己認識を深める読み

テーマ単元として、「父ちゃんの風」「ヒロシマのうた」を中心教材として読み、【4次】で、それぞれの作者の作品から「汽笛」「一つの花」をさらに読む活動を設定した。最後にこれら4冊を貫くテーマについて考える活動を設定した。作品は、どれも戦争を経験し戦後にかけて人々が人間性を回復し自立していく過程がテーマとして書かれた作品である。人間的な感情や個人が全て否定されてしまう戦争で一番犠牲となった子どもの姿が作品の主題に大きく影響している。学習者は、語り手の視点を通して子どもたちの一生を自分の立場におきかえたり比べたりしながら読み進めることで、平和を維持する気持ちを高めることを意図しての選書である。4つの作品の文学的要素を表にしたものから、共通点、相違点、貫くテーマについての話し合いを行った。それぞれについて学習者から出された意見が次の通りである。

【似ているところ】

- ・家族を戦争で失っている。
- ・戦争に関係している。
- ・子どもが登場する。
- ・兵隊に父をとられ、父親を失っている。
- ・平和を求めている。
- ・家族が死んでも誰も泣いていない。
- ・全ての話が途中で年月が経っている。
- ・過酷な話
- ・戦後の話が必ず書かれている。

【違うところ】

- ・「汽笛」の子どもたちには、家族がいない。
- ・家族の事が書かれていない。
- ・「汽笛」はハッピーエンドかアンハッピーエンドかがわからない。
- ・原爆の被害があるものとなないものがある。
- ・「一つの花」は、登場人物が少ない。
- ・物語の始まり方が違う。

共通点として挙げられた「家族が死んでも誰も泣いていない。」を取り上げ、「汽笛」の登場人物である戦争孤児の成りゆきやそれぞれの物語の中心人物である子ども達の生き方について話し合いを行い、周囲の人々に支えられ精神的な自立を果たしたことについて改めて確認した。そこから、作品全体を貫くテーマを書かせたところ、次のようになった。

【作品を貫くテーマ】

- ・戦争のない世界になってほしい。
- ・戦争をしても何一ついいことはない。何の役にも立たない。
- ・戦争は、人々に苦しい思いをさせるから、戦争をなくすようにしたい。
- ・戦争で何万人もの人が死んだので、もうその失敗がおこらないようにしたい。
- ・平和で仲良くくらせるようにしよう。
- ・戦争は、子どもの未来をどんどん悪くするものだからやめよう。
- ・被爆者の人は、戦争が終わっても苦しんでいる。
- ・今でも戦争をしているところがあるから、止めるようにがんばってほしい。
- ・人と人との差別をなくそう。
- ・戦争で障害をもった人を差別しないでほしい。
- ・戦争で被害を受けた人々の悲しみや気持ちをわかってあげてほしい。
- ・平和のために自分は何ができるのか？

一般論として、戦争に強く反対し平和を求めること以外でも、差別意識をなくそうという人権的問題や自分にできることは何かという具体的レベルへの認識へと変化が見られた。自分なら何ができるのか、平和のために何をやらなくてはいけないのかについて、考えをまとめる学習をテーマ単元のまとめとして行ったところ、次のような記述が見られた。

もし、世界が平和になっても苦しみ（病気・死）差別・悲しみ・お金がないなどして死んでしまう人もいます。だから、ただ平和になってもだめなのかなと思います。前に、テレビで見ただけで5才くらいの子がお金がないために売られてとっても危険な仕事をしていました。（火薬を使っていた）戦争がなくても、このような人たちがいるときいてとてもショックを受けました。中には、ゆうかいされてきた小さな子どもたちもいました。また、いまだにたくさんの人たちが死んでいます。私たち（日本の人たちは）、今、とってもとっても平和で幸せだと思います。将来、平和で苦しみ・差別・悲しみ・病気・お金がない人がいない世界になってほしいです。

戦争をなくすためには、人のために何かをすることです。なぜかは、まず、戦争を始める人は悪、悪の人は犯罪をする人、殺しても何にも思わない人、その人をなくすためには、人のために何かをすることだと思います。戦争を始める人は、たぶん、人を殺しても平気な人だと思います。未来は人を殺す人が少なくなっていると思います。

（下線 諏佐）

前者は、直接、戦争に関係がないところで生活している学習者自身が、平和という安定感を実感しながらも、それは、いつ崩れるかもしれない不安定さをもつものであることについて、テレビで見た社会問題との関連から認識している。このことは、テーマに基づく複数の本を読む体験が、平和やそれとは裏腹に存在する人々の苦しみに対する認識を深めたといえる。

単に戦争は良くないという一般的な浅い理解ではなく、戦争をなくすために具体的に必要なことは何か、自分なら何ができるのかという自分の現実生活のレベルに関連づけ考えることができることが自己認識を深めることである。平和教材を読むことは、その作品を理解し概念的なレベルの平和の大切さを認識する事ではなく、学習者の能動的な姿勢を引き出し、生きる力に直結するリテラシーを培うことが求められる。

5 まとめ

クリティカルリーディングによるディスカッションでは、課題に対し多面的に問い直しを図る。本論では、学習者が自ら新たな視点を見出し、問題提起しながら物語の解釈を深める場面が確認された。テキストを受容的、共感的に受け止めるだけでなく、自分を主体として改めて見直しを重ねていく。こうした読みの過程は、学習者が能動的にテキストに関わり、自己認識を再構成する姿勢を読みの方針として獲得していくと考えられる。

課題としては、次の3点が考えられる。一つは、テーマや学習者の発達段階に合わせて、クリティカルリーディングに適した内容のテキストについて教材開発を進める必要がある点である。選書の的確かどうかは、学習の達成度に大きく関わり、教師が常に読書し、視野を広げることが求められる。もう一つは、クリティカルシンキングでディスカッションするための言語スキルと学級集団を育成することである。根拠を明確に意見を述べることや、質問すること、的確に聴き取る力に加えて温かな信頼に基づく人間関係が築かれた集団を作ることが効果的なディスカッションにつながる。日々の学習活動において、具体的なコミュニケーションスキルを育成するための活動を意図する必要がある。

さらに一つは、学習者にディスカッションの目的を自覚させることである。評価にかかわり、どのようなディスカッションを目指すのか、活動前と活動後の自己認識にどのような変化が見られたのかについて強く意識づけるための手立てが必要である。

クリティカルリーディングを中核としたブッククラブは、読解スキルを培うだけではなく、学習者が自己の読みをメタ認知的にとらえることに意義をもつ。国語科では、基礎的な言語力の育成と共に、それらの言語力をトータルに発揮する場との両立を図ることが大切である。それは、国語という教科が、言語活動を通して学習者の豊かな人間形成を図り、生涯学び続ける姿勢を培うといった可能性につながるといえる。

【参考文献】

- 有元秀文（2010）「PISA型読解力」の弱点を克服する「ブッククラブ」入門 明治図書
 石原千秋（2009）「国語教科書の中の日本」 筑摩書房
 諏佐ゆかり（2009）「なぜ、文学教材にクリティカルリーディングが必要か」『国語科教育研究 第117回愛媛大会研究発表要旨集』 全国大学国語教育学会
 文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』 東洋館出版社